

小説『少女パレアナ』（エレナ・ポーター著、村岡花子訳）の中に、父と娘パレアナのこんな会話が出てきます。「聖書の中に、『喜びなさい』『楽しみなさい』っていうことばが何回出てくるか知っているかい？」「知らないわ」。「お父さんも知らなかった。だから、数えてみたんだ。すると800回も出てきたんだよ。つまり神様はね、それだけ私たちに喜んでほしいということだ。私たちが喜ぶことを喜ばれるんだよ。いつでも、どんなときでも喜びを見つけるんだ。喜びをさがし出すのが難しければ難しいほど、面白いゲームだよ」。

本日の聖書箇所、「身を慎んで」（13節）とありました。これは、原典のギリシャ語で「酔っぱらうことなく」という意味の言葉です。しばしば、宗教というものは人を酔わせて、現実を見えなくさせていると誤解されることがあります。しかし少なくとも、「聖書」の役割は、その対極にあると言って良いでしょう。人間の弱さ、強欲さ、残酷さ…そう言ったありとあらゆる愚かな人間の姿に向き合わせようとさせます。とりわけ、無実であるイエスが十字架で処刑されてしまった、そのいきさつをめぐって聖書に映し出されている人間模様は、見事なまでに私達の内面の弱さを言い当てています。「この人間の現実から目を逸らすな！」とでも言わんばかりに、人間を美化していないのです。とは言え、酔いしれることなく、誠実にこの世を受けとめていけばいくほど、私たちは悲観的にならざるを得ません。愛し合うこと、ゆるし合うことができず、そのために今も多くの人の命が傷つけられています。もう何事にも期待せず、希望を持たず、諦めて生きるしかない…それはこの世の不条理さを知った者の正直な実感ではないでしょうか。

ペトロの手紙もまた、教会がローマの大迫害に遭い、世の不条理を味わい尽くしていた時期に記されたものです。しかし、「イエス・キリストが現れる時に与えられる恵みを、ひたすら待ち望みなさい」（13節）と手紙は語ります。私達の生きる現実が、いかに悲観すべきものであっても、実は、すでに神の祝福によって包まれてしまっているのであって、勝手に絶望の中に逃げ込もうとする「欲望に引きずられることなく」（14節）、酔いしれることなく、きちんと神の現実を見ようではないかと語るのです。あるがままの、悲しいほどの人間の現実を直視する、だからこそ、希望とは「神にかかっている」（21節）ことを知るのであり、どんな悲観的な現実のなかにも神の祝福された現実があることを信じて、「いつも、喜びを探し出す」ことが出来るのです。

（文責：望月達朗牧師）

